

襖絵（狩野派と長谷川派）

釈迦堂の室内を仕切る襖には、日本有数の絵画一族である長谷川派と狩野派の絵が描かれている。狩野派は狩野正信(1434-1530)によって室町時代中期（1336～1573年）に創設された。すぐに日本画界の卓越した一派として評判を得て、幕府に好まれた。主に日本の芸術の黄金時代と考えられていた桃山時代（1568～1600）に新たに登場した長谷川等伯（1539～1610）が創設した長谷川派の台頭でその地位を巡って激しい競争が繰り広げられた。この期間中、狩野、長谷川の両派は今日国宝として認定されている作品を数多く制作した。

日本の歴史の中で多くの場合、芸術は、自分の家や寺院を装飾するために絵師に注文をする貴族やその一族の援助によって支えられていた。長谷川等伯は仕事を確保するために、後援者のために彼の多くの技術と時間を狩野派の第一人者である狩野永徳（1543～1590）との競争に費やした。両派が激しく競争した桃山時代、特に寺院や個人宅の絵は長谷川派が好みか、狩野派がいかによって決まった。その決定は普通一族の長か、お寺の住職の個人的な好みでなされた。注文を確実にするため、

依怙鼻肩の傾向があったにもかかわらず、狩野派と長谷川派の作品が永観堂には共に並んで飾られている。例えば、堂の西側の虎の間の「竹虎図」という題名の作品は長谷川派のものであるが、隣の四季の間の「松に山鳥図」は狩野派によって描かれた。どうやら、絵師自身でさえ、寺院で作品の場を共有することに抵抗があったようだ。永観堂は両派の作品を同じ建物内で見ることができる唯一の場所である。

長谷川派と狩野派の両派は、どちらも単色の薄められた水墨画で、中国風漢画と日本の大和絵を混ぜ合わせた特徴がある。両派の作品を区別することは困難な場合があるが、描かれた岩や木などの特定の共通要素の処理の仕方が比較の基本としてよく使用されている。